
未来からの転生者 オリ主は戦闘機人のようです

恋町小路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来からの転生者 オリ主は戦闘機人のようです

【Nコード】

N4911V

【作者名】

恋町小路

【あらすじ】

未来の戦闘機人コミチは大崩壊以前の世界の地球に時空間跳躍する。タイムスリップ

コミチは小路となって再び麻帆良学園に通うことになる。

そう、世界を変える要素を持った人間たちが集まる学園に。

現在、バカ女（恋町）に千雨たん振り回され中。

そして夕映と友達になろうとのかが恋町に接触するのだった。

とりあえず流されながら原作開始まで進めます。

生き延びるため子ども先生を利用させてもらいます（だが小路はお

バカである)。
図書組を中心に人間関係構築中。

(1) プロローグ・世界の終末(ある未来の終わり)

闇夜を切り裂き雷鳴が咆哮を上げる。

稲光が照らし出すは魔界の如き変容した大地。

夜、といったか、否、今は正午を過ぎた時間のはずだった。

空を覆い尽くす淀んだ黒い雲が日中の日差しを遮っているのだ。

闇がどこまでも支配する灰色の大地。

雷鳴と共に照らし出されるのは地平線まで続く地獄絵図。

倒壊した都市の成れの果て、折り重なって倒れた人の死骸は白骨

化し、髑髏の山を築く。

文明は死に絶え、大地は毒に侵され、草木一本すら生えることはない。

暗い空はまるで嵐のように暗雲が蠢いていて、まるで空そのものが一匹の巨大な竜であるかのようにだった。

戦場にいた兵士が叫ぶ。

そう、そこは戦場だった。

「来るぞ!!!」

次の瞬間、雲を割って幾重もの魔法陣が天空に現れていた。

兵士が指さした先、遙か空高くに異形の白い悪魔が姿を表していた。

あまりにも歪に変形した人型の兵器。

狂気を具現化したような、生物と機械を組み合わせたような醜悪な怪物。

巨大な異形の化物に対抗すべく設置された戦車群はあまりにも小さく見えた。

やがて砲撃が開始されると、同時にその白い悪魔の口から無数の翼を持った存在が戦場に向けて降り立っていく。

黒い雨が降り注ぐかのように空を黒い点が埋め尽くしていく。
悪夢の始まりだった。

地上の人類の用いる兵器と、天空から現れた悪魔の振るう魔力がぶつかり合う。

ひしゃげ、吹き飛ばされ、ねじ切られ、首を失い、焼きつくされ、凍り砕かれ、血をすすり、殺されていく。

開戦わずかの間に幾百もの命が無残に散っていく。

どちらが優勢ともいえない、暴力を振るう度に両陣営の兵力は削られていく。

魔を滅する化学魔導兵器と、魔法の力で人類を叩き潰す悪魔の如き異形の存在達。

ただひたすら、互いの存在を滅するためだけに戦っていた。

人類側は無差別に砲撃を打ち出し周囲を赤い炎に染め上げていく。敵味方の区別なく、周囲の仲間すら巻き込んで圧倒的な殺傷力を持つ炎がすべてを焼き尽くしていく。

「た、助けて」

下半身を失い、臓物を引きずりながら兵士は呻いた。

隆起したコンクリートの道に血と腸の一部をベッタリと貼りつけながらも男は生きている。

薬物によって一切の痛覚を遮断され、強化された肉体を持つ兵士だった。

人外の力を持った兵士でも、下半身と泣き別れではもう助からない。

それでもしぶとく這い上がり、紅く染まった空を見上げる。

その男の背中を踏みつけ、銃を頭に向けて一発の銃弾が男の頭を貫いていた。

返り血が飛んで女の褐色の素肌を汚した。

熱風が吹いて女の長い黒髪が揺れる。

女の魔族を表す瞳がランランと光り輝いていて戦場を眺め回す。

「これで終わりか……」

つまらん、とそう吐き捨てた次の瞬間、女が身を翻して、後方に跳躍する。

瞬時に十数メートルを跳躍し、倒壊したビルの壁を蹴って向き直る。

跳躍と同時に女が立っていた場に何かが高速で飛来してコンクリートを木っ端微塵に破壊していた。

立ち上る煙幕と爆風の衝撃波と瓦礫が女を追って、女は迫る瓦礫を銃で瞬時に打ち砕いていた。

女が衝撃波に吹き飛ばされるが、ダメージはない。

地に降り立つと同時に、破壊をまき散らした襲撃者が立ち上がった。

白銀のイメージを見にまとった女だった。

「ハン、まだ終わっちゃいないさあ、パーティーは始まったばかりだろ？」

「貴様が……」

うるんそうに黒衣の女が応えた。

十数メートル、そんな距離など無意味な距離だ、この二人にとつて。

世界は熱く紅に染まっていく。

全てを焼き尽くす地獄の業火のごとく、地上部隊の残存兵力がばら撒いたナパームが敵味方もろとも焼き払っていく。

黒衣の露出の高い服を着た、黒髪の銃を持った女の髪が熱風を受けて後方にはためく。

正面に立つのは白い髪の女、ぼさぼさのロクに手入れもしていない髪が赤い炎の色に染まって、まるで髪そのものが燃えているかのようだった。

黒衣の女が魔族なら、白い女も人間ではなかった。

人口の皮膚と関節の切れ目から覗くメタリックシルバーは人工的な輝きを放っていた。

「戦闘機人…… コミチ」

黒衣の女が白い女の正体と名前を告げた。

「これで三回目だっけ、あんたとやりあうのはさ」

「これで最後だ」

軽い口調の女、コミチに黒衣の女が告げて銃を乱射する。

白い女は戦闘機人の瞬発力を持って瞬動跳躍を繰り返しながら、あっという間に近接の間合いに入り込む。

「チツ」

白い残影を残した後に銃弾が跳躍して、コミチは黒衣の女に肉薄する位置に飛び込んでいた。

「ハッハー！！ 終わりにしてやんよ。マナ・アルカナー！！」

「舐めるな！」

ゼロ距離からの銃撃の連弾がコミチを襲うが、戦闘機人のボディを貫くには至らない。

金属がこすれあうような音を響かせた後、コミチの一撃がマナの胴体に食い込んでいた。

胃液が吐き出され、マナは片膝をつく。

追撃の拳が連弾となってマナに襲いかかり、その肉体をサンドバッグにすると、大地にヒビが走り、陥没していく。

並の人間なら一撃でミンチになる乱撃の応酬でもマナの肉体を破壊するには至らない。

両者ともすでに人外の存在であった。

その場の地盤が耐え切れなくなって崩壊を起こした。

二人とも地下の奥深く、崩落を起こした穴に飲み込まれていた。

地下世界の深く、かつては地下鉄が通っていた駅で戦いは繰り広げられる。

闇を銃撃のフラッシュが切り裂く。

繰り返される火花の応酬が起る度に何かが破壊されていく。

マナの放った重力弾がコミチを捕らえ、マナが実弾入りの銃を向ける。

「本当に最後だ」

酷薄な感情のこもらない声でそう告げる。

その瞳に白い女が映る。

「そうだったけ？ ケケケ」

応じるコミチは笑っていた。

「何もかも終わりさ、世界も私達もな。人類は遊びすぎたんだ」

「そりゃ、違いねえ。誰かが終わらすんじゃない。あたしらの世界はあたしらがぶっ潰すまで終わらない。壊すんならあたしの手でやるよ」

向けられた銃口に目を細めてコミチが答えていた。
百倍もの重力の中で話せるだけでも大したものだった。
重力弾は結界も内包しておりコミチを締め上げていく。
並の生物なら圧縮されて潰れたトマトのようになっていく。
戦闘機人のボディはそれほど強靱だった。

「お前は終わりだ。貴様に殺された仲間の仇を取る」
「だったら、何故、さっさと止めを刺さないんだい？」

正面から見つめあう二人、マナは苦笑いする。

「最後の殺し合いがかつての学友とは、皮肉だな」

「馬鹿だな、マナは本当に馬鹿だよ……あたしは戦闘機人だ。人を殺すための殺戮マシンなんだ。だから躊躇いなんてしない」

「知っているさ」

「いいや知らないね。マナ、あなたはあたしが殺してあげるううう」

コミチが叫ぶと、その身を拘束していた重力場がかき消えていく。
魔法陣の結界を打ち消したのは、コミチの体に浮かび上がった禍々しい黒い術式だった。

マナはしまったと銃で狙い打つが、その全弾が現れた黒い魔方陣に吸い込まれて消失していく。

まるで喰われたかのようにだった。

コミチの全身にいくつも浮かび上がるのは黒き紋様、マナの目が大きく見開かれる。

「何！？ それは……」

「懐かしいだろ？ あんたは知ってるんだよなこれ、マジア・エレベアをさあぁ」

闇を纏い、闇にその身を喰われながら叫ぶコミチの目も髪も黒く染まっていく。

「ククク、闇の魔法ってやつだ。こいつはずいぶんと制御するのが大変だったらしいんだけどよ。戦闘機人に必要なのは理性じゃねえんだ。出会ったもの、すべて殺す。理性を捨てて全部を力に変える。プログラムによって制御することをあえて放棄した、出会った者をただ喰らい尽くすための呪法、それがあたしのマジア・エレベアさ。これ作った奴、吸血鬼の真祖だっけ？ ヒヒツヒ。もうすぐ全部真っ黒さあ。遊ぼうぜ、マナあ」

黒いオーラを解き放ち、眼から口から闇の魔力が噴き出している。あまりにも禍々しい禁呪の魔力が世界を侵食していく。

「では、貴様を殺すのに私も遠慮などしない」

マナの目が光り輝いて凶気を帯びていく。解放される魔力、ただ殺すためにその力を欲する。肉体そのものを化物に変じて、マナはコミチとぶつかり合っていた。

破壊の奔流が吹き荒れて大地が唸りを上げる。地響きと共に世界は崩落していく。

(2) 時を越えた転生者 恋町小路

暗がりに電灯がついて洗面所にパジャマ姿の一人の少女が立つ。背は高すぎず低すぎず、見た目は十代の中学生くらいの少女だった。

寝ぼけた顔つきだが、その顔は端正で、鼻筋もよく、バランスのとれた稜線を描いている。

特徴的な灰色の髪がアンテナのように何本も立っていて、ゆらりゆらりと揺れている。

鏡の中の目付きの悪い女が自分を見つめていて、寝ぼけてはいるがそれが自分だと認識はしていた。

「ふわぁ…あうふぁ……」

派手に欠伸を漏らして鏡の中の顔が歪む。

だらしなく洗面所に手をついて、呆けた間抜け顔で電灯にたかる蠅を一瞥する。

ブンブンブン……ブンブンブン……ジジジ……

耳障りな音が狭い洗面所に響く。

不意に少女の手が伸ばされて、素早く蠅を捕まえていた。

じつと指に挟んだ蠅を見つめた後、ぺろりと舌に乗せて飲み込んでいた。

ゴクリ、と細い喉が何の躊躇いもなく飲み干す姿を見れば、大抵の人間は引くか、この少女は頭がオカシイのではないかと疑うことだろう。

残念ながら、いかれてもいないし薬物もやっていない、これがこの少女の素面の姿だった。

「ブンブンブン　フヒヒ、お腹の中でブンブンブーン」

ブンブンブン、と口の中で繰り返し、ひとしきり笑った後、壁に背を預けて背中を引きずるように座り込む。

青いパジャマがめくれて背中をむき出しにして硬い床に胡座をか
く。

華奢な体を深夜の空気がしんしんと冷やしていくが、まるで気にせず鼻歌を歌っている。

「あーあ」

虚空を見つめる少女はリノリウムの床に寝そべる。

灰色の髪が無造作に広がる。

電球の明かりが目を刺して、薄茶色の色素の薄い目を閉じる。

床の硬さも、体の冷たさも気にすらしていなかった。

世界は時間を止めている。

平和な空間だ。

平和すぎて気が狂いそうだった。

初めてお前らに言うておくことがある。

あたしの名前……何だっけ？

キャハハ、嘘嘘、名前忘れるわけないだろ、記憶喪失とかないな
いって。

あたしの名前は恋町小路だ。

生前の、いや前世かな、その時の名前はコミチっていうんだ。
んで今は小路、ほれおんなじ名前だよ。

偶然かって？　まあ偶然じゃねえんだなこれがよ。

実はあたしは最近まで大怪我して入院してたんだよね。

どれくらいって？

半年らしいよ、うん、まあ入院する前のことは最近になるまで忘れてみたいでさ。

でも記憶喪失じゃないぜ、記憶喪失つてのはよ、個としての記憶を持つ存在が連続して持つ経験を脳のどこかに置き忘れた状態ってことらしい。

そしてだ。

あたしはそれが記憶喪失じゃないとはっきり断言することができ
るんだ。

何故なら、この小路が生きてきた記憶、あたしの記憶、それには
はつきりとした違いがあるからなんだ。

病院で小路として意識が覚醒した頃、あたしは全身を拘束されて
て、ついでに包帯まみれ、何があつたかはわからないが、医師も看
護婦も避けやがるしまとも口を聞けるのなんていなかったな。

一応両親から事故に遭ったことは聞いたし、自分がまたこの世界
に舞い戻ってきたのだと確証することができた。

ああ、前世でもないし、生まれ変わりでもねえ、体が治り、見た
目まで変わる頃にはあたしはすべてを思い出していた。

さて、恋町小路は恋とか愛とかそんなものは全然わからないし興
味もない。

そしてまかり間違つても乙女回路なるものも存在しない。

相手が男だろうが女だろうがだが、いっちょ前に色欲は普通に存
在する。

しかしまあ、中学生の貧相な体に欲情するのは変態さんでロリで
ツルペタ好きという一部のマニアック向けな嗜好を持った人種であ
ろうと想像に難くないのであるが、その手のオタク趣味でも恋町小
路は避けるのではないかと思われた。

つーか、こんなのに惚れる男は皆無なんですか？

あたしはパジャマを着て洗面所の鏡の前に立った自分を眺めていた。

体は冷え切っていて、正直立つのも面倒くさかった。

ああ、クソ、生身の肉体つてもろくてやなんだよな。

人生やり直すなら機人のボディ持ち込みを今度は提案したいところである。

まあ次なんてないんだけどさ。

さつきまで床で寝てたせいか、肩のあたりでバツサリ切られた髪はボサボサであちこちが跳ねている。

ちなみに癖毛で酷いときは三本くらいアホ毛アンテナが立つ。

後かなり目付きは鋭い。

やぶにらみじゃあないが、特に普通にしても睨まれてると思われるらしい。

色素の抜けたような灰色の髪と薄茶色の瞳に、その不健康で白い肌は一目でお前日本人じゃねえだろと突っ込まれそうだが全然違う。

あたしは純粹なる日本人で戸籍も日本人だ。

フルネームで恋町小路。

麻帆良学園中等部1年A組32番。

32のドベになってるのはクラスへの途中編入があったせいだ。

普通は入学直後に編入生なんて入るわけがねえ、がねえが、入っちまったんだから仕方ねえ。

番号は変えられないらしいから、つーわけで、一番ケツのドベなわけね。

まさか自分がまた麻帆良学園に通うことになるとは思ってもいなかった。

何だか、正直騙された気分だが、恨みつらみを言いたい本人は遙か先の世界にいたりするわけよ。

しかも、もつとも関わってはならないデンジャークラスに入っちゃうとは思ってもいなかったわけよ。

初めに、いや二回目か……とりあえず、言っとくわ。

あたしは未来人だ。

世界がぶっ壊れた後の、戦争やってた未来からやってきた、とは言っても、別に未来を変えるために過去をどうにかしようなんてまったく思ってたねえ。

っーか、不可能だ。

死ぬ、死んでしまう。

今のあたしは生身で、魔法なんて使えないし、連中と戦えるような特別な力も持っていなかった。

今いる世界に何が起きるのか、わかっているのは世界が崩壊する何かが起こったのが、この麻帆良学園に原因があるってことだけだ。

鍵となるのはネギ・スプリングフィールドっていう、うる覚えだが10才の子ども先生だ。

そして魔法使いでもある。

あと数年もすれば誰もが知る超有名人になる。

滅茶滅茶悪名高い大悪党である。

少なくとも、あたしのいた時代ではそうだった。

この世界でどうなるのかなんて知らんし、第一、まだイギリスにいるみたいだ。

んで、もう一人は超鈴音。

もう一人の大悪党な。

この女のせいであたしの生きた時代は地獄同然だった。

まあ、いなくても地獄だったんだろっけどな、それは置いて、こいつは全世界に魔法をバラした張本人だった。

さて、何があったのかちと話しくわ。

ぶつちやけ言つと、地球と魔法世界との間に起こった戦争の末に人類は衰退した。

文明も何もかも壊れちまった世界で生き残った……いや死にかけていたあたしは助けられた。

その頃の蘇生技術は脳みそさえ残つてりゃ、生体パーツの組み合わせで生存することが出来た。

おかげで生き残れたけど、手術の過程で体の色素が抜け落ちまった。

手に入れたのは戦闘機人のボディだった。

あたしの年齢は正しければ40になる。

あ？ ババアだと、ちよつと面貸せや……まあそれも置いておこう。

今から数年以内に世界を崩壊させる何かが起こり、魔法世界はぶつ壊れ、地球も無事ではいられなくなる。

超鈴音はそれを止めようとしてたらしいが失敗した。

いいか、奴は失敗した。

魔法を全世界にまき散らして無責任に失敗した。

魔法バレによって世界に魔法が溢れた。

そして起こるのは戦争さ。

地球人の間で魔法の取り合いと軍事利用がなされ、終いには殺られる前に殺れ、獣のように喰らいあう醜い戦争が起こった。

それから数年で魔法世界が崩壊して、行き場を失った奴らは地球侵攻をしてくる。

受け入れようがない、どちらかが死に絶えるまで続く大戦争さ。

そしてやつちまった。

核よりも恐ろしい魔導兵器の投入によってすべてを焼き尽くす業火に世界は包まれた。

わずかに生き残った人類も文明も何も失って滅びるだけだった。

そんな時、あたしはあたしを助けてくれた博士からこの世界がどうしてこうなってしまったのか、その始まりの話を聞いたのだ。今となってはもうどうしようもない事実。

そして言ったんだ。

タイムマシンを作ったってな。

時空を越えるアイテムなんてのは昔からあった。

あったけどそいつを使って戻ってきた奴なんていなかった。

正直、子どものおままごとでしかなかった。

何だ、博士の戯れか、とあたしは思った。

過去でも変えたいのかい？ 博士と聞いた。

でもあの人は弱々しく笑ってこう言ったんだ。

救ってあげてほしい、***をつてな。

呆れてものが言えなかった。

でもいいさ、どうせ、あたしは一度は死んでるんだ。

タイムマシンが途中でぶっ壊れて死んでも、ここで死んでも同じことだ。

だから、いいよって答えた。

そしてあたしはタイムマシンに乗ってこの時代にやってきた。

懐かしくも幻想の平和が仮初めにもある時代に。

この体に転移したとき、ああ死んだと思った。

タイムマシンは正確に恋町小路に『転移』した。

聞いてねえよって思ったね。

まさか大崩壊前の自分自身の体に入り込んでしまうなんてな。

その事故で12才の恋町小路は死亡した。

そして未来からやってきたあたしが融合した。

ぶっちゃけ、胸糞の悪い話だ。

まあ、あたしは何とか生き残った。

精神が融合したせいで、あたしの経験した世界の記憶を見たせいで元の恋町小路の精神は崩壊し、自ら精神の死を選んだわけ。

あたし？ あたしは凶太いからね、脳みそかき回されたぐらいで死にはしない。

実際されたらアレだけどさ比喩だよ比喩。

元の恋町小路は脳をそんな風にクラッシュされて死んだのよ。

南無阿弥陀仏。

他人ごとだつて？ まあ仕方ないだろ？ 生きるか死ぬかの瀬戸際なんだし。

あたしも追い出されたら死ぬからな、軽く叩き潰しちまった。

んで、その事故は中等部入学半年前の頃だった。

二ヶ月ほど植物状態で、それからしばらく記憶が混濁してたな。

誰が誰だかもわからねえ。

見舞いとか来たらしいんだけどよ、まったくわかんねえや。

意識が戻って、それまで身動き一つ取れなかったが、リハビリで何とか動けるようになった。

それからだな、本当の自分の記憶を思い出したのは。

恋町小路はごく普通の中学1年生で、髪も目も黒かったが、謎の事故に巻き込まれて大怪我をした。

意識不明の間に身体特徴の書き換えが行われ、あたしが気がついたときには前の世界で見慣れた姿になってたわけ。

決定的に違うのは若いつてことだな。

別に若いからいいわけでもない。

中学生のボディの貧弱さにはリハビリ中に何度も泣かされた。

そう言えばさ、一つ思い出したんだ。

ああ、思い出したさ、恋町小路は内向的で常に独りきり。

本当に忘れてたよ、児童書を読むのが大好きな文学少女だったとかね……

なにせこの十数年後には戦闘機人としていくつもの戦場を渡り歩いた殺戮マシーンに変わり果てるのだから人生ってわからないね。

ああ、戦闘機人てのは魔法使いと正面からやりあうために開発された地球側の兵器だ。

沢山殺した。

魔法を使うのも、戦闘機人も同じくらい殺した。

戦争の末期はもうただの殺し合いで、ただの人が生き残るなんてとうてい無理な世界。

戦うすべのないものはみんな死んじまったよ。

あたしの両親も親戚とか、元のクラスメイト達もみんな死んだ。人の死を何度見たのかも憶えていない。

心なんてとづくに壊れている。

だけとおかしいんだよ。

狂ってるはずなのにさ、あたしは何でまだ生きてるんだろう？

笑い声が漏れていることに気がつく。

ああ、何であたし、この体で生きててよかったなんて思ってるんだ？

「フッフハ、へへ、へ、おっかしいよねえ」 アツハハハ

水道の蛇口を強く捻ると水が派手に迸ってパジャマを濡らしている。

水が受け口からこぼれてびちゃびちゃと足元に溢れていく。

「おい！ 恋町うるせーぞ！」

「ハン？」

振り返ったあたしの顔を思い切り女が張り飛ばす。

「おっまえ、頭おかしくなったのか！？ 水止めるバカー！」

笑みを張り付かせたままの、ずぶ濡れなパジャマ姿のクラスメイトを見て、同室の長谷川千雨は水道の蛇口を閉める。

「まったく、おめーは常識ないのかよ！」
「あ？」

あたしの目の前にいるのは同室のクラスメイトである、長谷川千雨だ。

細い手足、小さな頭。
いつでも殺せる、無防備な後ろ姿を晒して雑巾をかけている。
口の端を吊り上げて笑う。

「あー、お前邪魔！ あっち行ってる」

千雨は後ろ手にしっしっしと追い払うように手を振る。

めんどい……あたしは部屋に入って、パジャマを適当に脱ぎ捨ててベッドに潜り込む。

今、午前四時かと時計を確認する。
睡眠なんて二時間ありゃ十分だな。
スリープモードに移行し、一瞬であたしは眠りについた。

「あー、くそ町め。貴重な睡眠時間返せよゴラあ……」

何とかあのバカ女が水浸しにした洗面所を片付けて、自分の濡れたパジャマを乱暴に脱ぎ捨てて、洗濯かごに突っ込んで部屋に戻る。
が！ またかよ！ この女、常識ってものがなさすぎる！
千雨はこめかみに血管が浮かぶのを軽く押さえる。

クソ！

「こ、こいつまた……そこは私のベッドだろうがー!!」

千雨のベッドを占領するのは、後二時間は絶対起きないであろう小路だった。

朝、寝不足な千雨は疲れきった足取りで登校するのだった。

(3) のどかのトモダチ作戦(前)

私の名前は長谷川千雨。

ごく普通の中学生一年生でごくごく普通の家庭で生まれ育ったピ
ープルだ。

私は超常現象なんか信じない。

それと薄っぺらな人間関係なんてものも信じない。
群れるなんてゴメンだね。

いつだって頼れるのは自分自身の感覚だけだ。

だが……そんなもの吹っ飛ばすくらい私の住んでる町はぶっ飛ん
でる。

超常現象、怪奇現象なんて日常茶飯事、毎日どこかでなにかが起
こってる。

だが誰もそのことで騒ぎ立てねえ。

いや、おかしいだろ！

町中で原因不明の爆発騒ぎがあっても次の日には報道すらされね
え。

ガス爆発で済まされちゃう。

ありえねえよ、地上数十メートル上でガス爆発するわけがねえ。

それを誰かに言っても、こうだ。

すごかったよね！ だとさ……

なあ、実はもしかしておかしいのは私なのか？

頭がいかれてるのは実は私で、この世界のこれが常識なのか？

ありえねえ……わかってはいるんだ、それはありえねえ。

私は正常だ。

ここがおかしすぎてみんな狂ってることにすら気がつかないのか？
そうじゃなきゃあの馬鹿でかい木があるのだって異常だと思うは

ずだ。

この町には小学生の頃から住んでる。

私の両親はまともな方だったと思っている。

なのに町に出ておかしいと思うことがあっても、この人達は全く気にも止めない。

その時初めてこの世界の異常性に気がついたんだ。

ありえないものがあるのにみんな知らんぷり。

この町には何かがある。

異常を異常と思わせないように誰かが仕組んだ仕掛けがあるんだ。

危険過ぎる。

声を高らかにばらしてやりたくなる。

だがそれをすればどうなる？

ハハ、私消されるかもな？

私が存在した証拠すら残さずに、長谷川千雨という女をを消し去ることなんて簡単なことなんじゃないのか？

だから私は何もしない。

非常識な世界から背を向けて目を閉じる。

そして耳を塞ぐ。

そうしていれば少なくとも何の不自由もない毎日を過ごすことができる。

……そのはずだった。

非常識の塊のこの女が現れるまで……灰色白髪頭の暴力が服を着た女だった。

「よー千雨たん、ノート見せるよ。宿題やってねーのよ」

「おい、バカ町、貸すなんて言っつてねえぞ」

私は何故か隣の席になっちまった恋町にガンを飛ばすが、知らぬ風というふうにはバカ女の手が千雨の両肩を揺する。

「あん？ 宿題終わってんだろ？ ほらなんだっけ？ ノープレス オブリッジユだっけか。持てるものは持たざるものに分け与えるんだよ。つー訳で見せな」

「それが人にものを頼む態度かよ。私は貧民なんだ、お前いい加減にしろ！」

そう告げる私を無視して鞆から中身を掴んでひったくった女、恋町小路を睨みつける。

「何だ、けちけちすんなよ」

クソ！

恋町が掴んだノートと教科書が何冊かまとめて落ちる。

パラパラと教科書がめくれている。

今日もこうして、まだ新品に近い教科書がバカ女に汚されるわけだ。

「んーどれだ、宿題のノート？」

あームカつく。

バカは構うだけ無駄だ。

対処法は一つしかねえ。

正しい答えは、望むものを与えてやる、だ。

それで少しばかりの安寧という時間を買うわけだ。

こいつは私の前に現れた時間泥棒という奴だろう。

そんな児童小説あったよな？

「これだよバカ」

差し出したノートを恋町が遠慮もせずを受け取る。
いつか絶対、この女に復讐をしてやるうと誓う千雨であった。

「お！ フへへ、サンキュー千雨ちゃん。口ではいよいよ言っても、
熱く感じてるのね」

「おい、キモイわ！ 何が感じるだー！」

「キャハハ！ いやーん、千雨ちゃん照・れ・て・るのね」

ぐ……と、思わず拳を握りしめる。

な、殴りてえ……

その時、私は視線を感じる。

さっきからずっと、こっちを見ている。

何だ？

話しかけてくるわけでもなく、好奇心から見ているわけでもない。
こちらが視線を向けると、さりげなく外を眺めるふりをして千雨
の視線をかわした。

窓際に近い席、そこに彼女は座っていた。

あれは綾瀬夕映、出席番号4番。

彼女が見ていたのは私じゃない。

綾瀬と私には何の関連も共通点も見当たらない。

同じクラスになってから話したことなどほとんどないのだ。

つまりは消去法だ。

綾瀬が見ていたのは、つまりはあのバカ女、恋町小路である。

そのバカ女はノートを広げて自分のノートに写している。

おい馬鹿やめろよ……思いつきり堂々とやってんじゃねえよ。

話しかけるのも嫌だ。

私は頭を抱えて目を閉じる。

クソ眠い……

「ねえ、千雨ちゃんよお」

「うるさい」

私はそのまま寝ることにした。

「おい、バカ町。代弁しとけよ」

「ん、わかった」

奴はノートを書き写しながら答える。

こつこつという餌付けっていうのか？

まあいいや……どうでもいい。

そして千雨はそのまま睡魔に身を任せていた。

綾瀬夕映は思う、世の中は常識だらけでつまらない。

そう思っていた。

しかし意外と、非日常というものはすぐ側に転がっていた。

そういう形で思い知るといふのは不本意なことだけど仕方がない。

祖父が…死んだ。

祖父の死は、私の世界がいかに脆弱なものであるかを思い知るきっかけとなった。

人が死んだらどこへ行くのか？

大霊界？

死後の世界は本当にあるのか、なんて考えたこともなかった。

でももしかしたら靈魂が住む世界があるのかも知れない。

もし今死んだら、私は祖父に会えるのか、それとも違う世界に生まれるのか。

考えがまとまらない。

葬儀会場を後にして、骨だけになった祖父は軽かった。

綾瀬夕映　それが私の名前だ。

でもその名前に意味はなく、ただそこに存在する抜け殻にすぎない。

意味のある存在であるのはそれを認識する者がいるからこそだ。

誰にも認識されない存在、それは幽霊と同じだ。

私はもはや幽霊と同じだ。

そこにあつて存在せず、誰からも知覚されない。

私自身が非常識で非日常に生きる存在に変わってしまった。

それを望んだとも言える。

ユエに、この世界に意味はなく、すべてはくだらない

私の中の常識というタガが外れたのは祖父の死がきっかけだった。でも本当は、「彼女」がいち早く「向こう側に」行ってしまったことが原因だったと言えるかも知れない。

何故そうなったのか、そうなってしまったのか、事故なんて何故起こったのか、回避できなかったのか、解決方法など存在しない。

それはすでに起きてしまったことだった。

恋町小路は綾瀬夕映の幼馴染だ。

引つ込み思案の本の虫で、半ば幻想の世界に足を突っ込んだ、私を理解してくれる唯一人の人物だった。

そして愛すべきビブリオ・マニアでもあった。

その彼女は今や病院で生死の淵を彷徨い、二度と戻らぬかも知れぬ世界に旅立とうとしている。

いや戻るのかも知れないが、植物状態の人間が生きていえるのか、私にはわからない。

世界に飽いた私に、世界はどれだけ非常識なメルヘンがあるのか

を語ったのも彼女が始めてだった。

児童文学に手を出したのは彼女がきっかけだった。

非常識は素晴らしい。

それを私に刷り込んだくせに、本人はいとも簡単に非常識なる世界への片道切符を切って、あちらの世界に行ってしまった。

これほどの非常識はない。

ああ、そうだ、私は彼女という存在と同等の存在になりたかった。だから幽霊で構わないのだ。

中学に入学し、つまらぬ常識の世界で非常識に浸かる私は周囲とは浮いた存在となっていた。

何せ私は幽霊なのだ。

そして今日もしつこく宮崎のどかが話しかけてくる。

ああ、うるさいですね。

席を立った私を追って、宮崎が追いかけてくる。

知ったことではないのです。

そして職員室を通りかかり、一人の女生徒の後ろ姿を見つけた。

白く、どこまでも白のイメージを身にまとう妖精だ。

そしてその横顔を見てしまった。

ああ、何故

彼女はここにいて。

ここで笑い。

そして存在するのか？

それは私の知る恋町小路ではなく、人格もまるで違う上に、容姿はそのものでありながら、その色素をすべて抜き出されたようであり、傍若無人なまでに周囲の常識を破壊する存在になっていた。

そして私を無視するのも非常識だ。

いや、目線で私を認識しているのはわかる、が、決して踏み込んでこないのが余計に気になって仕方がない。

まるで、さあ、ここからが非常識の境界線だ、踏み越えてみるがいいとあざ笑うかのようだ。

彼女という存在は、彼女が変わってしまふ前から常識の一步外にいた。

そして嫌でも自覚させられるのだ。

私は結局、常識の世界に生きる一人の人間なのだ、と。

そして今日も一言も話しかけられなかった。

今日こそは夕映さんにお話を聞きたいなと思ってたんですが、また逃げられてしまいました。

夕映さんの姿は図書館島でよく見かけるので、何度かお話ししたいなと思ってるんですが、どうにも私はとろいのか、いつも逃げられてばかりいます。

パルなんかはやめときなさいって言うんだけど、夕映さんは本がとても好きな人です。

パルっていうのはクラスメイトの早乙女ハルナで、同じ図書館探検部に所属しています。

こないだも私が借りたいなと思ってた本を夕映さんが全部借りていって、すぐに返却に来ました。

凄く読むのが早いです。

そしてお話ししたいなと思ったんです。

それに彼女なら図書館探検部に入ってくれるかも知れません。

だから、彼女が何に興味を惹かれるのかをこの一週間観察し続けました。

「おい、のーどーか？」

「はい？」

コツンとノートの端が宮崎のどかの頭にぶつかり、のどかが見上げると早乙女ハルナが横にいた。

「また恋煩いかいな？ くくく、めくるめく百合の世界…宮崎のどかが愛するのは文学少女、綾瀬夕映。二人は禁断の恋に落ちるのであった」

のどかの隣に座り、ノートを広げたハルナが即興でデフォルメされたのどかと夕映を描いて抱き合わせると、赤くでハートマークを描いてみせた。

「ち、違うよパル。わ、私は探検部に入って欲しいかなって…」

「はいはい、でも無理っぽくない？ あの子、のどかから逃げまわってるし、ラブラブアタック作戦大失敗っぽくない？」

「ラ、ラブラブ…そんなんじゃないってば」

「お前は何でいちいち赤くなるかな…：ははあ、意識しすぎて、本当に好きになってしまったと？」

からかうハルナにのどかは懸命に否定するのだが、のどかを出汁にからかうのがハルナの性分なので、いつも適当に美味しくいたただくのである。

「もう違うってば〜」

「あ、見てる。やっぱり例の子」

顔を赤くしてそっぽを向いたのどかにハルナが囁いて、最後尾の席に視線を投げかける。

「え？」

綾瀬夕映の行動パターンを観察していたハルナとのがが発見した、夕映の教室での行動は、ある人物への注目と語ることができる。他の生徒はそんな事実には全く気がついていないが、ストーリーカーのごとく綾瀬夕映を見続けてきたのどこには、その人物こそがキーなのだと思えることができた。

即ち、綾瀬夕映は教室ではある一人の人物に対し、何らかの深い思いを抱いているという事実だった。

禁断の恋とかそういう類のものではないような気がする、というのがその見解で、何となくだがそれは当たっているような気がした。

しかし将を欲するとすればまず馬からと、そんな言葉を思い出して、宮崎のどかはその人物、恋町小路に接触を試みることを決めたのだ。

恋町小路は中途からの編入生だ。

長谷川千雨とは同室らしいが、千雨とのがの接点はクラスメイとという以外、あまり見当たらなかったから、間に入ってもらうのは難しく思えた。

まあ見ていて、恋町小路はかなり破天荒な人物であるのはわかる。インドアタイプの本好き少女であるのどこには、近づきにくいタイプの少女である彼女は、かなり適当な人物でもある。

まず行動が女っぽくないし、ガサツの極みである。

服もアイロンを当ててないのかいつもヨレヨレで、乱暴な男っぽい言葉も使う。

そうでありながら、その容姿はやたらと目を引いて、人目を引かずにはいられないのだ。

唯一、長谷川千雨だけが、その猛獣を御せるのだという噂がすでに事実のように知られていた。

しかし運動神経は抜群で、一年A組の五天王の一人と言われている

る存在でもある。

のどかの観察の結果、彼女は食い気に弱いことが判明していた。釣るのは食券である。

私は握りしめた食券を手に、いざ尋常に勝負！ という心持ちで彼女を追うのだった。

「あの、恋町さんっ！ 今日お付き合いですか？」

言った、言ってしまった。

授業の合間の時間、トイレから出てきた彼女に食券を持った手を差し出して、のどかは渾身の思いで要件を告げた。

周囲からどよめき上がる。

まさか、宮崎が、だと？

のどかは途端に急に恥ずかしくなる。

勢いで突っ走ってしまったけど、今のって告白みたい？

思わず頬が熱くなり、のどかは視線を下げていた。

目の前の彼女は色素の薄い瞳をのどかに向けて、その手から食券を受け取る。

「っはん、子猫ちゃん、ゴチになります」

と、のどかの耳元で囁いた。

口元に少し意地悪な笑みを浮かべた彼女が去って、のどかは猛獣に睨まれた兎のような気分だった。

怖い、でも、彼女が夕映さんの何なのかを知るチャンスを手掴んだ。もし仲良くなれば夕映さんも友達に、あわよくば同じ図書館探検部に、というハルナが巡らせた作戦だった。

第一作戦は成功しました。

これからが本番の第二作戦です！

(4) のどかのトモダチ作戦(後)

「フシシ、いただきまーす」

目の前でバカ町が何杯目になるかわからないプリンを貪り食っていた。

食い過ぎだ、それに遠慮も全くねえ。

デリカシーもクソもない。

まあ、元からそんなものがこのバカ女にあるわけもないのだが、それにしても、と千雨は目の前でニコニコしている宮崎のどかを訝しんで見た。

恋町小路、長谷川千雨、宮崎のどかの三人がいるのは学食だ。

学食と言ってもマンモス学園の生徒達数万人を支える学食であるから、学食の棟の至る所が食事処となっている。

小学生以下は給食がメインだが、中学部から大学部まではこの学食を利用する。

中には弁当組もいるが、そういう層もここではちらほらと見ることがができる。

学部とりどり、多種多様な光景がすでに日常だが、未だに千雨は慣れないでいる。

むしろ、周囲の柔軟性が信じられない。

ああ畜生、昼飯がただなんて言葉に惑わされるんじゃないなかつた。

千雨は悔恨するが、実際の所、千雨の懐事情はピンチであったから、バカ町が食券を見せびらかせて奢ってやるよという誘惑に勝てなかったのだ。

ああ畜生、もう次からは絶対に付き合わないからな！

そう千雨は心の中で吐き捨てる。

そして目の前にいる宮崎のどかを警戒する。

いったい、この女に近づいて何が目的なんだ？

絶対に怪しいし、食券を丸ごと賄賂に使うなんて腹黒には見えなかったんだが、手口がどうも嫌らしい。

宮崎らしくない。

らしくないと思うが、実際に千雨は宮崎のどかという人間を知っているわけでもなかった。

ただ怪しいという気持ちを抱かずにはいられない。

何せこいつらに接点など欠片もないし、話しかけたことも話しかけられたのも初めてだからだ。

私は常に一歩下がって関わらないようにしてたし、バカ町もそんな素振り一つなかった。

例外はこいつが馬鹿騒ぎして周囲が巻き込まれるくらいだ。

関係あるとしたら、あれか、綾瀬夕映か？

宮崎のどかが綾瀬夕映と何故か接触しようとしているらしく、その現場を見たこともあるが、どうも相手にされてないようだ。

そしてその綾瀬夕映はバカ町に何故か執心だ。

コレは何かある。

別に関わりたいわけではない。

だが知らないで巻き込まれるのと、知っ上で巻き込まれるのはわけが違う。

私はピエロに成り下がるのはごめんだ。

何も知らずに利用されるのもだ、宮崎のどか、何を考えてるんだお前は？

私は宮崎のどかを監視することにした。

警戒するに越したことはない。

それが恋町か綾瀬に対する悪意か好意かは不鮮明だが、厄介ことはゴメンだ。

自分の身は自分で守るしかねえ。
千雨はお茶を啜りながら二人を観察することにした。

何だ、千雨ちゃんは機嫌悪いな？ せっかく誘ってんのによ。
あれか、腹痛か、あの日なの？ と聞いたらデコピンが飛んで来る。

にしても宮崎のどか、か、どういづつもりかは知らないが、食券丸ごとなんて太っ腹だろ？

小路はプリン五個めをたらい上げる。

小路の懐には食券24枚綴りが収められている。

すでに5枚程使っているが、普通は2枚も使えばデザートも付いて腹を満たすには十分だが、小路は遠慮なく食券を切る。

告白なんてもんじゃないことは明白だ。

明らかに目的がある。

ハン？

まあ何が目的でもいいけどな。

目の前で恋町さんが美味しそうにプリンを食べてます。

フフ、好きなんですかねえ？ 何というか豪快です。

それに何となくサバサバしてて意外と話しやすい人でした。

一緒に長谷川さんもついてきたけど、何だか機嫌が悪いのか、私を少し睨んでいます。

何か嫌われるようなことをしてしまったのでしょうか？

それにしても、自分でも少し大胆なことをしてしまいました。

宮崎のどかは自分でも思うのですが、少し奥手すぎる人間です。積極的に話かけるのは大の苦手です。

でも引いてばかりも要られません。

私は夕映さんを知りたい。

そして彼女に繋がる人物は恋町さんなんです。

だからどうしても、ちよつと強引でも関わりたいと思いました。

今はちよつとでいい、これからもこの人に話しかけるきっかけは作りました。

とはいっても作戦はパルが立てたんですけどね。

長谷川さんの目付きが厳しいです。

もしかして気づかれちゃった？

ど、どうしよう。

「千雨ちゃんよ、のどかちゃんが怯てんじやんよ。そう睨むなつて」

「あん？ ドライアイでさ、目が乾燥してんだよ。細めにして乾燥を防いでるんだよ」

「あの、そうなんですか？ これ使ってください」

のどかが口を出し目薬を差し出すのを、一旦戸惑うが千雨は受け取る。

「千雨たん、あたしが差してやんよ」

「触んなつっの。自分でできるわ！」

「うおっひよっひよ」

「うぜえ！」

千雨は立ち上がってテーブルの端に行ってしまうが、小路がその背にしなだれかかり、その脳天に千雨のチョップが振り下ろされるのを、のどかは啞然として見守っていた。

喧嘩するほど仲がいいというのはこういつのかな。
そう思いながら、のどかはこの二人とも友達になれるといいなと思っていた。

「パール」

遠くからのどかが手を振って、ノートにネタを描き込んでいた早乙女ハルナはそれを閉じて腰を上げた。

のどかの様子からして、まあファーストコンタクトは上手く行ったようだ。

穴だらけの工夫のへったくれもない作戦だが、のどかがシンプルで恋町がバカなので助かった。

単純に食券で釣るという行為は、警戒はされるだろうが、表向きはお友達になりましょう作戦だから、最初の接触が上手く行って警戒が解ければ問題ない。

もっとも、もう一つの本来の目的である、綾瀬夕映に近づく目的があるのだが、余計な情報は与えず、こちらが最大限の利益を得られればいい。

私ならば意図を隠して接触することもできるが、余計な腹の中を探られるのがオチだろう。

隠すものが多いほど、情報を引き出す対象からは警戒されやすい。その点で、脳天気なほど黒さが見えないのどかでなければ作戦は成功しないと踏んで、私は待役に徹することにしたのだ。

のどかの脳天気さは折り紙つきの人畜無害、初対面の相手でも警戒心を抱かせない天然である。

早乙女ハルナはずれた眼鏡を直す。

待ち合わせの世界樹広場は今人は人通りは閑散としていた。

頬にかかる髪をつつとうしく後ろに払って、やってきたのどかに合わせて歩き始める。

二人して向かうのは図書館島だ。

「上手くいったかい」

「うん、パルのおかげだよ」

「ひしし、食券分の働きをしたようで何より」

「あ、あれのお金出すよ！」

「あん？」

「だってお金……」

「あれ、景品でもらったんだよ。春の漫画コンクールでさ。学生組合の景品交換ポイント貰ったんだよ。それで食券貰ったから元手なんてかかってないしさ」

「え、そうなんだ。パルすごい」

のどかが鞆を抱いて称賛の声をハルナに贈る。

その素直な反応がハルナには少し恥ずかしい。

言ったことは真実だが、少しは疑うことを知らないと世の中は渡っていけない。

そんなことを思いながらもハルナ的にはのどかにはあまり変わって欲しくないものだと思っして、矛盾する己の思考に苦笑いする。

天然というものは知らずの内に影響を受けているものらしい。

「まあ気にするなっってこと、OK？」

「うん」

路上バスがやってくるのを二人して待ち、図書館島方面のバスに乗る。

いちいち切符を買う必要はない。

学生証は路上バス利用でのパスカードとして使用することができる。

支払いは月で固定されているから利用しなければ損である。
それでも月あたり千円にもならないから、路上バスは常に満帆である。

外周の手すりの部分に捕まって、二人は風を受けながら図書館島の方を向いていた。

早乙女ハルナと宮崎のどかは図書館探検部の新人である。

図書館探検部とは、文字通り広大な図書館島を探索し、新たな地図にその足跡を残すことを目的に作られた巨大サークルであり、年齢、学年を問わず、様々な目的を持った人々が所属していた。

宮崎のどかは言わずとも本の虫であり、常に本を呼んでいることから「本屋」ちゃんというあだ名がすでに定着していた。

早乙女ハルナはどちらかというと漫画研主体のだが、ネタの宝庫として図書館島はまさに宝の山であったから、図書館探検部には知り合いの先輩に誘われたこともあり入部していた。

同学年の同クラスのよしみから、二人はいつの間にかつるむようになっっていた。

麻帆良湖から図書館島が望めて、渡るのに橋を利用する。

異国風情たつぷりの情緒溢れる建物群なのであるが、建物の天井から端、地下に至るまで本で埋められた常識世界から一切隔離された場所だった。

「新人！ 救出物資をA館に運んでくれ、B館が倒壊の危機だ！」

「は、はい」

「えー、なにーなに？」

着くと同時に現場は修羅場だった。

後ろからがっちり両肩を土方風の大学生部員に掴まれて、二人は

早々に積み重ねられた本の山へ連行されていた。

周辺には本が散らばっている。

それを一冊ずつ丁寧にのどかが拾って埃を払う。

ポンポン、埃が舞う。

「あー、バツクれない……」

「あはは……パルさ」

「ん？」

「パルは何で図書館探検部に？」

「何で？」

そんな事を今更聞くのか？

ハルナはのどかの意図を測りかねる。

本を抱えたままのどかが別の本を拾う。

のどかの伸びた前髪がたれて顔を隠す。

その横書を眺めながら、ハルナは図書館探検部に入った動機は何だったのかなと思いつく。

「何ていうかさ、最初はどうでもよかつたんだよね」

「うん」

「特に本探しとか性分じゃないしさ、ネット漁ればネタなんていくらでも見つかるじゃん？」

のどかはしゃがんだまま、そのまま動かずに、じっとハルナの言葉に耳を傾けている。

「でもなんか、入学の後とろそうなのが変なのに勧誘されてさあ
「はい？」

中等部編入の後、新規部員を獲得しようとする各部の勧誘員達が

こぞつて一年生をターゲットに獲得しよう和我先に声をかけていたのだ。

多分に漏れずハルナも捕まった口だが、元より漫研に入るつもりでいたから適当にあしらっていた。

図書館探検部もその一つで、知り合いの先輩からもらったチラシをポケットに突っ込んでいた。

本人としては当初は図書館探検部に入るつもりなどこれっぽっちもなかったのだが。

そして絡まれながらも熱心に変なコスプレ兄ちゃんの話に熱心に聞いていたのどかと会ったのだ。

入学時にぼーっとした奴がいるなと思ったその少女が怪しげなコスプレに勧誘され、困り顔で断り切れない姿に合を煮やして割り込んだのだ。

「えと、勧誘の時の？」

「そうそう、お人好しが断りきれずにいたからね。貰ったパンフ突きつけてやったんだよね。この子は図書館探検部だよってね」

「うんうん、あの時は助かったね。パル、カツコよかったよね」

髪が揺れてのどかから笑顔が溢れ出る。

その一瞬にハルナはどきりとしてしまう。

時折この娘は人をどきりとさせるような表情をする。

そんな顔や表情を見るのがハルナは好きだった。

「んで、そのまま流れで何故か部員になってたしさ」

「えー、そうなんだ」

「で、何？ 何でそんなこと聞くの？」

「えとね、パル、私と一緒にいてつまんなくないかなって思って。

私、喋るの苦手だし、一度本読むと没頭して回り見えなくなるし」

何を言ってるんだ、この娘は？
馬鹿なの？

「はい？」
「えと、その……」

もじもじするのどか、ハルナは溜息を付いた。
そしてのどかの頭に手のひらをポンつと乗つけてクシャクシャとくする。

「友達だから、別に問題ない。そんでいいじゃん」
「パル……うん、友達、だよな」
「あー、馬鹿言ってるんで手え動かせ」

くるりと振り向いて、ハルナは本を拾い上げる。
くそー、のどかの奴、私に恥ずかしいセリフ言わせたな。
ぐ……お、重い。

両手に抱えた本の重さによるけるハルナ、その肩を抱きとめて、
のどかが本を半分取り上げる。

「ふひー、あぶね。サンキュ、のどか」
「一緒に運ぼうね、パル」

機嫌よく鼻歌を歌い始めたのどかが先に歩き出す、その後を本を
抱え直したハルナが追いかけた。

主人公設定 『恋町小路(こいまちこみち)』 (前書き)

登場人物設定晒してなかったので書いて見ました。

主人公設定 『恋町小路（こいまちこみち）』

本編の主人公コミチ。

その正体は未来人です。

未来では魔法界が崩壊して、地球世界も色々とはつちりを受けて大戦争したせいで、人類そのものが死滅を待つのみとなってしまう世界です。

超は魔法を世界にばらしたものの、起きた混乱を収束できずに暴走を許してしまいます（結果、超は死亡？）。

コミチの知る未来では完全なる世界は存在せず、魔法界の崩壊は食い止められませんでした。

そしてネギ達も魔法界と人間界の人間達同士の戦いに巻き込まれて大変な悪党になるとのこと（コミチ談）。

コミチ自身はネギやその従者のことは聞いた限りでしか知りません。

現代へはこの時代に生きていた恋町小路の精神にタイムトリップ憑依する形で転生します。

元の平和世界に生きていた文学少女であった恋町小路は未来のコミチの記憶を見て発狂し、自ら精神の死を選びます（グロいなう…）。

《恋町小路》データ

誕生日：

1988年7月7日

星座：

かに座

年齢：
12才

学年：
中等部1年A組

出席番号：
32番

性別：
女性

血液型：
O型

身体的特徴

身長：
153? > 155?

>は二年進級後の測定により

体重：
常に変動する。平均値は不明。

3SIZE

B：

71 > 73

W：

5 5 > 5 6

H :

7 5 > 7 8

> は二年進級後の測定により

髪の色 :

白灰色。

瞳の色 :

色素の薄い茶色。

肌の色 :

透き通るように真っ白。

内面的特徴

好きなもの :

何か昔は読書が趣味だったかな。

児童文学とかさあ(笑)忘れちゃったよ。

嫌いなもの :

好き嫌いしてたら生き残れないぜ?

性格と行動 :

快楽的で目の前にあることが大事主義。

傍から見て奇行が目立つが、その行動には大した理由もないようだ。友人に対しては理由もなく好意的に振る舞うことも多いが、それを好意と受け取れるかは人次第。

自堕落で社交的な性格でだれにでも馴れ馴れしい。

言動 :

男っぽい。

すでに小路であった頃の喋り方などは捨て去っている。

対外関係

所属クラブ・部活：

まだ未所属。

幼馴染：

綾瀬夕映

寮の同室：

長谷川千雨

級友：

宮崎のどか

早乙女ハルナ

戦闘機人の能力

*明らかになっっている能力を書いています。現在の小路のステータスは人間より強い程度です。

腕力：

コンクリートの壁程度は軽く破壊するようです。

俊敏性：

弾丸並に早い？

耐久力：

通常のハンドガンレベルでは貫けない。

特殊能力『マギア・エレベア』：

エヴァの生み出した闇の魔法と呼ばれる呪法。

『掌握』とかするのは不明ですが、戦闘機人に埋め込まれたプロ
グラムらしい。

マナの銃弾を吸収したりしてるので、かなりの使い手であるよう。

主人公設定 『恋町小路(こいまちこみち)』 (後書き)

コミチの設定を書きだしてみました。

いろいろと適当です。

ネギ先生はやくきてー！。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4911v/>

未来からの転生者 オリ主は戦闘機人のようです

2011年10月1日03時10分発行